

凡 例 解 說

凡 例 一 覧 表

寒帯・高山帯自然植生

1. 111 ハイマツ—コケモモ群集
2. 112 ミネヤナギ群落
3. 120 高山ハイデ及び風衝草原

17. 451 アスナロ群落

18. 470 ヒメコマツ—クロベ群落

19. 490 サワグルミー—ジュウモンシシダ群集

20. 4A0 シオジ—ミヤマクマワラビ群集

21. 4B0 ハルニレ群集

亜寒帯 亜高山帯自然植生

4. 251 オオシラビソ群集
5. 252 シラビソ—オオシラビソ群集
6. 253 コメツガ群落
7. 260 ダケカンパーササ群落
8. 270 カラマツ群落
9. 280 ミヤマハンノキー—ダケカンパ群集

22. 4CC ヤナギ高木群落

23. 4C1 ドロノキー—オオバヤナギ群落

24. 4H1 ミズナラーリ—ヨウブ群落

25. 4H9 ヤシ—ブシ群落

62. 4E0 ハンノキー—ヤチダモ群集

63. 4H0 自然低木群落

亜寒帯・亜高山帯代償植生

- 1 0. 311 チシマザサ群落
- 1 1. 312 クマイザサ群落
- 1 2. 330 伐跡群落

ブナクラス域代償植生

26. 510 ブナ—ミズナラ群落

27. 530 クリー—ミズナラ群落

28. リョウブ群落

29. ヘビノネゴザ群落

ブナクラス域自然植生

- 1 3. 410 ブナ—チシマザサ群集
- 1 4. 420 ブナ—スズタケ群集
- 1 5. 421 ブナ—ヤコザサ群集
- 3 6. 428 ツガ—コカンスゲ群集
- 1 6. 440 ウラジロモミ群集

30. 570 ニシキウツギ—ノリウツギ群落

31. 591 ミヤコザサ群落

32. 592 チシマザサ—クマイザサ群落

33. 5A0 ススキ群団

34. 5E0 伐跡群落

ヤブツバキクラス域自然植生

- 35. 610 モミシキミ群集
- 37. 6K0 フサザクラ群団
- 38. 6M0 河辺ヤナギ低木群落

ヤブツバキクラス域代償植生

- 39. 710 ヲナラ群落
- 40. 730 伐跡群落
- 41. 760 ススキ群団
- 42. 762 アズマネザサーススキ群集
- 43. 7A1 アカマツヤマツツジ群集

河辺・湿原・塩沼地・砂丘植生

(各クラス域共通)

- 44. 810 ツルコケモミズゴケクラス
- 45. 820 ヌマガヤオーダー
- 46. 850 ツルヨシ群集

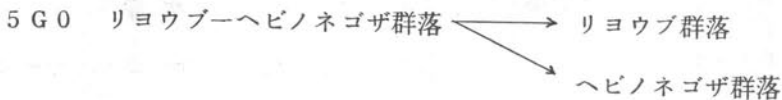
植林地・耕作地植生 (各クラス共通)

- 47. 911 アカマツ植林
- 48. 913 スギ, ヒノキ, サワラ植林
- 49. 921 カラマツ植林
- 50. 971 モウソウチク林
- 51. 990 落葉果樹園
- 52. 9A0 桑園
- 53. 9C0 苗圃
- 54. 9D0 畑地
- 55. 9F0 牧草地 (人工草地)
- 56. 9F1 ゴルフ場
- 57. 9G0 水田

その他

- 58. A10 市街地
- 59. A30 工場地帯
- 60. A40 造成地
- 61. A70 自然裸地

※環境庁凡例以外の凡例



第1回植生調査においてリョウブーヘビノネゴザ群落としたものであるが、特異性によって2群落に区分した。

1. ハイマツーコケモモ群集（コケモモーハイマツ群集）

（相観）－高山常緑針葉樹低木林

日本の高山帯を代表する植生はハイマツーコケモモ群集と名付けられている。高山の頂上部では、冬季季節風が吹きすさび、植物は想像を絶する厳しい条件の下で越冬を強いられる。冬の季節風が直接つきあたる風上斜面と、風が山越しをする尾根では、雪は風に吹きとばされてさほど積ることはない。ハイマツはこの雪の少ない風上斜面に成立し、また季節風が山越しをするせまい屋根筋ではもはやハイマツの生育を許さず、岩場にはりついたような丈の低い群落・コメバツガザクラ－ミネズオウ群集が成立する。

栃木県内で典型的なハイマツーコケモモ群集がみられるのは、那須三本槍岳の周辺である。奥日光にもハイマツは見られるが、意外に場所が局限されていて、女峰山と温泉岳に小面積しか存在していない。

また、1979年に大佐飛山陵線に、ハイマツの存在を確認したので表示した。

2. ミネヤナギ群落

(相観) - 高山(夏緑広葉樹)低木林

奥日光白根山の火口壁の頂部にはハイマツに代ってミネヤナギが優占種となっている。

同階層にミヤマビャクシンを見るが、下層は、ハイマツ-コケモモ群集に等しくコケモモ、ガンコウラン、シラネニンジンが出現している。

3. イタドリ-コメススキ群落(高山ハイデ及び風衝草原)

(相観) - 高山荒原草木

那須・茶白山の東斜面に草本ばかりの群落が発達している。一見したところではハイマツ-コケモモ群集と似てはいるが、近くによって調べてみるとコメススキやウラジロタデが多く、ハイマツ-コケモモ群集とは区別しなければならぬ群落であることが分った。

4. オオシラビソ群集

(相観) - 常緑針葉樹の高木林、亜高木林

奥鬼怒の鬼怒沼山から黒岩山をむすんで北にのびる県境の山々は、その頂部を連ねて男鹿岳に到るまで、(オオシラビソ)群集が発達している。この群集の特徴は、アオモリトドマツの他はコメツガが混るだけでシラビソとトウヒを欠いている点にある。大佐飛山の頂上も同じくこの

群集の領域であることが分った。この群集は日本海型気候域にのみ成立する特徴をもっている。

5. シラビソーオオシラビソ群集

(相観) 一常緑針葉樹の高木林

奥日光の切込・刈込湖畔の針葉樹林ではコメツガが少く、シラビソとオオシラビソ(アオモリトドマツ)の優占度が著しく高くなり、シラビソーオオシラビソ群集と呼ぶに値する森林がある。おそらく地形が急峻の場合にはコメツガが、緩斜地の場合にはシラビソやオオシラビソが優占種となるように思われる。これはツガ型森林とモミ型森林のちがいと云えるであろう。

6. コメツガ群落

(相観) 一常緑針葉樹の高木林, 亜高木林

赤石山脈(南アルプス)や秩父山地では、コメツガ群集が亜高山帯の下部に、シラベーオオシラビソ群集は上部に生育地を分けている。奥日光の男体山ではコメツガの生育が高所にまで及んでいて、上下関係がはっきりしない。また、亜高山帯森林が、比較的新しい火山地に発達するため、ブナ帯の優占種であるササ類が山地帯をぬけだして亜高山帯にまで生育地をひろげて北斜面以外はひろくササでおおう点も本県の特徴といえる。

7. ダケカンバーササ群落(ササーダケカンバ群落)

(相観)一夏緑広葉樹の高木林

日光田母沢源流域斜面にミヤコザサを林床としたダケカンバ林があり中腹斜面一帯をおおうミヤコザサ草原とともに、日光高原の主要な景観を構成している。また那須岳西側のおよそ1,200 m以上の斜面、さらに三本槍岳から三倉山、大倉山にいたる県境域の1,400 m以上から、高山帯に接するところまで、帯状に長く分布している。

8. カラマツ群落

(相観)一夏緑針葉樹の高木林

奥日光の男体山には天然のカラマツがあつて、しばしばコメツガ林の中に混っている。戦場ヶ原周辺にみられるカラマツはほとんど植栽されたものばかりである。植生図には、刈込湖北方の天然カラマツ林を表示した。

9. ミヤマハンノキダケカンバ群集(ミドリユキザサーダケカンバ群団)

(相観)一夏緑広葉樹の高木林・亜高木林

奥日光五色沼をかこむ、すり鉢地形の壁面にダケカンバーミヤマハンノキ林が発達している。この森林は亜高山帯針葉樹林が山腹の崩壊により解体したあとに生じた林である。

斜面崩壊の原因には暴風となだれが考えられよう。ミヤマハンノキは高山帯下部および亜高山帯において、同属のヤシャブシ・ヤマハンノキ林

は山地帯において、ともに山腹の崩壊地に成立している。

ハンノキ属は根に根瘤をもち、空中窒素を固定する能力がある。

このことが崩壊地のようなやせ地にも耐える原因であろう。

13. ブナーチシマザサ群集（チシマザサーブナ群団）

（相観）－夏緑広葉樹の高木林・亜高木林

日本のブナ林は鈴木時夫により日本海側のブナーチシマザサ群集と、太平洋側のブナースズタケ群集に大別されている。

ブナ林と林床のササ類とは密接な結びつきがあつて、日本海側ではチシマザサとクマイザサ（チマキザサ）、太平洋側ではスズタケとミヤコザサの4種類が重要な種である。栃木県では奥日光から塩原、那須にかけて日本海型気候と太平洋型気候の境界線が走っているので、これと対応して本県のブナ林もまた別の群集が名付けられている。

北西部山地の日本海側ではチシマザサを林床優占種とするブナ林がひろく分布している。別表13は塩谷郡栗山村川俣のブナ天然林の調査表である。こゝではチシマザサ及びクマイザサの優占度が著しく高い。

14. ブナースズタケ群集（スズタケーブナ群団）

（相観）－夏緑広葉樹の高木林

栃木県におけるブナースズタケ群集の領域はきわめて散在的である。その理由はスズタケの分布が火山灰土壌とは結びつかず第三紀層地質やこれより古い地質とかなりの関係があるからである。

その好例は中禅寺湖北岸の高山で花崗岩の山体は密にスズタケでおおわ

れているのに反し、となりの男体山では頂上に到るまでミヤコザサが分布している事実である。このスズタケの領域も急斜地以外はミヤコザサの侵入をうけて次第に置き換わりつつある。火山灰土壤で厚くおおわれた丘陵地台地にはスズタケは皆無である。ここではミヤコザサも又少なくアズマネザサとアズマザサの領域となってマツ型森林と結びついている。

15. ブナーミヤコザサ群集（ヤマボウシーブナ群集）

（相観）－夏緑広葉樹の高木林・亜高木林

前述のように栃木県の冬は乾燥気流に支配されるので、いわゆるおろし風の吹き下す地帯のブナ林では、寒さに強いミヤコザサの繁茂が著しい。

群馬県と栃木県の県境に位置する袈裟丸山。奥日光男体山の東南斜面塩原の北に連なる小蛇尾川流域の山々、また那須火山の東斜面にみられるブナ林ではミヤコザサは広く林床優占種となっている。このようなブナ林に対して筆者はブナーミヤコザサ群集と名付けている。別表1はその組成を表わしたものである。とくに塩原北の小蛇尾川流域のブナ林がミヤコザサを林床優占種とする天然林であることは、1979年の調査により始めて確認され、今回の栃木県植生図で訂正しておきたい。

16. ウラジロモミ群落

（相観）－常緑針葉樹の高木林

男体山の南斜面、1,700 m 付近にウラジロモミとダケカンバを優占種とする森林が帯状に発達している。奥日光の第三紀地質の山々では、

地形が急なため、コメツガ林の発達がよく、本来の高さよりも下部にまでコメツガ林が下って、直接ブナ林と接続するためである。ウラジロモミはこの外、男体山の山足部に至るまで、ブナ・ミズナラ林の中に常在種として存在し、ときにこれらを圧倒するほどの優占度をもつ。

17. アスナロ群落

(相観)ー常緑針葉樹の高木林・低木林

アスナロの分布は亜高山帯下部から山地帯にまたがっている。奥日光では湯元の東、三ヶ岳のふもとおよび男体山の北西山麓に純林に近いアスナロ林がみられる。那須の板室温泉から大川林道沿いに男鹿川を上ると、途中のブナ林にアスナロが多く出現している。

また、矢沢の源頭地域にも、優れたアスナロ林が分布する。

18. ヒメコマツ・クロベ群落 (クロベ・ヒメコマツ群落)

(相観)ー常緑針葉樹の高木林

亜高山帯から山地帯にまたがって、岩角地に発達するのがヒメコマツ・クロベ(ネズコ)林である。ヒメコマツの外にコメツガの優占度が高い。筆者はかつて奥日光の植生調査をした際に、三ヶ岳の火口壁・および社山の北斜面の稜線上にこの森林を確認したことがあった。

19. サワグルミ・ジュウモンジシダ群集 (ジュウモンジシダ・サワグルミ群集)

(相観)ー夏緑広葉樹の高木林

ブナ林の谷筋に限って、組成の異なる群落が発達している。すなわら

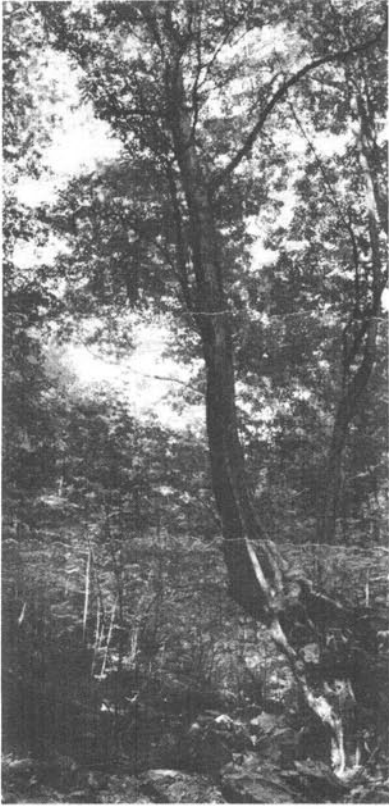
サワグルミー・ジュウモンジシダ群集である。高木層の優占種はオヒョウとサワグルミの他、イタヤカエデ、カツラ、トチノキ、チドリノキ等が混生している。このサワグルミ林では、ササの生育地が一旦崩壊したあとの崩積土の上に成立するもので、ササがないために草本層の種類は著しく多いのが目立っている。シシウド、モミジガサ、オシダ、カメバヒキオコシ、ミズナ、キバナアキギリ、カンスゲ、クサアジサイ、ミヤマカンスゲ等が主なものである。この群集の存在が重要な意味をもつのはこの群集の林床植物の中で、とくにシカやカモシカに好んで喰われる種が存在するからである。中でもモミジガサとミズナは著しく養分含有量が高く、とくにカルシウム分が多い。小蛇尾川流域のブナ林、また袈裟丸山のブナ天然林にシカやカモシカ、サルなど大動物の生息数が多い事実、この群集の存在に関係するところが大きいことを強調しておきたい。

20. シオジーミヤマクマワラビ群集（ミヤマクマワラビ・シオジ群集）

（相観）—夏緑広葉樹の高木林

本県では唯一の自生林であるシオジ林は、安蘇郡田沼町根本沢の深い谷に沿って帯状に群落をつくり、イヌブナ、サワグルミとともに高木層を形成し、シオジーミヤマクマワラビ群集となって分布しており、極めて貴重である。

本地域は、足尾山地の中央部に位置し、山麓にイヌブナ、沢沿いにシオジ、急峻な谷や尾根にツガとカエデの針広混交林、山頂部にツガ林が分布し典型的な新生代第3紀温帯林の特徴をもった天然林からなっている。



安蘇郡田沼町のシオジ林

21. ハルニレ群集

(相観)－夏緑広葉樹の高木林

ハルニレ林は沢沿いの氾濫原に成立する。

栃木県では、奥日光の千手ヶ浜，外山川流域，地獄沢流域に存在している。この中でとくに千手ヶ原は多くの谷がこゝに合流する地点にあり，過去において，しばしば氾濫がくり返されたにちがいない。同じハルニレ林でも林床植物を考慮すると二つの異った組成群からなっていることに気付く。スゲ型とササ型林床のちがいである。

ササ型は土壤の乾燥化に伴って生じた終期の相と考えられる。

22. オオバヤナギ群落 (ヤナギ高木群落)

(相観) - 夏緑広葉樹の高木林, 亜高木林

日当りのよい沢すじには, オオバヤナギ林が成立する。奥鬼怒, 無砂谷の奥や八丁の湯 - 女夫淵の沢沿いに, また奥日光では切込・刈込湖畔にこの森林をみることができる。この森林もハルニレ林と同様, 新しく堆積した土石流の上に発達する。種子が風に飛ばされ易いヤナギ類 (オオバヤナギ, オノエヤナギ) はこのような山地溪谷土石流の先駆種となり得る。オオバヤナギ林の林床植生は前述のサワグルミ林のそれと共通するところが大きい。

23. オオバヤナギ - ドロノキ群落

(相観) - 夏緑広葉樹の高木林

男体山西方山麓の沢筋に分布。

24. ミズナラ - リョウブ群落

(相観) - 夏緑広葉樹の亜高木林

この群落は茶臼岳南東斜面の高度 800 m から 1,400 m に広がっている。

茶臼岳一帯は近年になってからの火山活動によって植生の破壊があったことが考えられる。また那須山麓の一帯は冬期裏日本からの北西風が収れんして関東平野に吹きぬける所で特に風の強いところである。

これらの影響で山地帯の植生が十分に発達せず風衝地における耐性の強いミズナラと火山灰を母材とするやせ地に耐えるリョウブの森林が成

立をみたものである。

25. ヤシャブシ群落

(相観) - 夏緑広葉樹の高木林、亜高木林

ヤシャブシ林は山地帯の崩壊地や河川敷に発達する二次林である。男体山の山体には籬とよばれる放射谷が数多くみられる。籬の斜面はいたって不安定な砂地であるが、そこにまずフジアザミ、ヤマヨモギ、イタドリ、クサボタンなどの先駆種が定着する。これら先駆種と同時に定着したヤシャブシやヤマハンノキが生長して林床に陰を作ると、ニシキウツギを主とする低木層があらわれ、テンニンソウ、アズマヤマアザミ、ヤマトリカブト、オヤマボクチ、ソバナなど高茎の半地中植物の密生した草本層ができ、初期の先駆種と交代する。この段階がさらにすすみ、土壌の有機物が増すとともに、林床には各種のツツジ類が増え、草本層はスゲ型へと移行する。その種類はシロヤシオ、トウゴクミツバツツジ、ヤマツツジ、アズマスゲ、イトスゲ、クロヒナスゲなどである。このような植生の変化をサクセション(植生遷移)と呼んでいる。

ヤシャブシ林やヤマハンノキ林、ヤハズハンノキ林、ミヤマハンノキ林等、ハンノキ属(*Alnus*)に属する種類は、山腹の森林が破壊されると、いち早く侵入してハゲた林地を修復する役目を果たしている。したがって初期に出現する草本類は特に山地の砂防上重要な意味をもつ。

26. ブナーミズナラ群落

(相観) - 夏緑広葉樹の高木林

西北山岳地のおよそ600mから上は、このブナーミズナラ群落が大

部分を占めている。上方は、ブナーチシマザサ群落あるいはアオモリトドマツに接しており、伐跡更新林もかなりの面積がある。下方はクリーミズナラ林となっていることが多い。塩谷郡栗山村，塩原町，黒磯市，那須郡那須町の温帯上部の広大な地域が該当し，中木層には，ナツツバキ，マンサクを始め多様なカエデ類を，低木にはアカヤシオ，シロヤシオ，ムラサキヤシオツツジ，トウゴクミツバツツジ等の県花を含み，種類豊かな森林景観を呈している。

27. クリーミズナラ群落

（相観）－夏緑広葉樹の高木林

ブナ帯下部にも多少入り混っているが，クリーミズナラからブナーミズナラへの中間推移植生として分布している。

渡良瀬源流域の足尾山塊，日光，高原山，那須山の中腹域に広がっている。肥沃な土地では良好な生育を示し，トチノキ，キハダなど適潤土壌タイプの樹種をまじえているところもある。常在度の高いものとしてリョウブ，コシアブラ，ウリハダカエデ等カエデ類があげられる。

28. リョウブ群落

（相観）－夏緑広葉樹の亜高木林

リョウブ林は煙害地の周辺に広く存在し，ほぼ純林に近い林相を示す。国立公害研究所の報告によれば，リョウブは重金属含有量が他の植物にくらべて著しく高い特徴をもつということである。煙害裸地の緑辺部にひろく分布する理由もこの点でうなづけられよう。